

Actions taken for Improving the Conversation Ability for "Beginner's Japanese" Class with a Time Limit of Half Semester

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市原, 乃奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/207

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



半期という時間制限がある中での 「初級日本語」クラスの会話能力向上のための 取り組みについて

市 原 乃 奈

1. はじめに

筆者は2015年度までの5年間にわたり、武蔵野美術大学の初級日本語クラスにおいて「見る・聴く・話す」を網羅する学習プログラムの開発と実践、そして日本語能力検定試験2級を目指す文法指導を非常勤講師として担当してきた。2010年から2013年までは武蔵野美術大学には専任の日本語担当者が存在しなかった。そのため、担当するクラスは自分でプログラムを考え、次のレベルへ橋渡しすることが求められてきた。筆者は、本務校やその他の非常勤先の事例と比較しつつ、この大学の初級日本語クラスの履修者が抱える問題とも向き合ってきた。そこには、芸術系大学特有の問題が山積していた。筆者の任期は今年度で終了する。これを機に、「時間」という視点から構築した初級クラスの学習プログラムの実践と効用について検討していくこととする。

このプログラムの基盤データは、筆者が担当してきた2010年～2014年までの武蔵野美術大学の「初級日本語」を履修してきた学生76名⁽¹⁾の学習記録である。本稿執筆にあたり、そのデータ開示を快諾してくれた。また、このデータをもとに構築されたプログラムの実施に際し、本年度筆者が担当している武蔵野美術大学「初級日本語」の履修者および、筆者の本務校である目白大学の「表現演習Ⅱ」の履修者で小学校教諭志望の学生7名、筆者の非常勤先である川口短期大学の「日本語表現法Ⅰ」の履修者4名、埼玉学園大学の「日本語学概論」の履修者で教職志望の学生3名に協力を得た。いずれの学生も筆者が無理やり協力させたのではなく、日々の会話から興味をもってくれた学生である。目白大学と埼玉学園大学の学生は「国際交流」「留学生の友達ができるかもしれない」という期待から協力を希望してくれる学生が多くいたが、作業項目等を説明した上で面談し選抜させてもらった。本稿執筆にあたり、彼らからもデータ開示に許可を得られたことをここに提示しておくこととする。

2. 半期という時間制限の壁

半期といえども留学生が1つの科目を受講する回数は14回～15回であり、1回で90分という時間内でできることは限られている。筆者は首都圏の111校の日本語学校⁽²⁾で設定されている目標レベル到達までの期間等を調査し、表1と表2にまとめた。表1を見てみると、初級から中級に到達するまで1時限45分～50分で構成される授業で、880時限～900時限を費やしている。大学で学ぶ初級クラスの留学生であっても、中級クラスにレベルアップするためには440時限～450時限が必要とされるということである。表2では、初級から上級に到達する段階を5段階のレベルで区切り、各レベルで必要とされる学習内容をさまざまなスキルに分けて整理した。

在学生が50人以上の日本語学校では全てこのようなレベル分類が確認できた。そしてこの学習内容は、国際交流基金と日本国際教育支援協会が主催している日本語能力試験（以下、JLPT）の認定レベルの基準⁽³⁾に合わせて構成されていることがわかる。初級から1段階上に移行するま

表 1-1 コースで費やされる期間・時限数・到達レベル

N3 程度～N1 以上までさまざま（0 初級はほとんど受け入れなし）		
修学期間	時限数 (45～50 分 1 時限)	目標レベル
1 ヶ月 (4 週間・バケーションプログラム)	80～88 時限	・異文化理解 ・現状よりスキルアップ
3 ヶ月 (短期)	220～240 時限	・異文化理解 ・現状のスキルに対するブラッシュアップ ・現状より 1 ランク上の日本語能力試験合格

表 1-2 コースで費やされる期間・時限数・到達レベル

初級から始めるコース（0 初級の受け入れあり）		
修学期間	コースの時限数 (45～60 分 1 時限)	目標レベル
1 年 (総合コース・進学コース)	880～900 時限	＜初級～中級＞ 日常生活を送るために必要なコミュニケーション能力を伸ばす
1.5 年 (総合コース・進学コース・ビジネスコース)	1,300～1,340 時限	＜初級～初中級＞ 目標の進路に対応（合格・内定）できる日本語力の習得を目指す
2 年 (総合コース・進学コース・ビジネスコース)	1,740～1,780 時限	＜初級～上級＞ 合格・内定後、進学先や職場での生活がスムーズに行えるよう、進路に応じた日本語力の習得を目指す

表 2 各レベルの修業期間と項目別到達目標

レベル	初級	初中級	中級	中上級	上級
学習期間	3 ヶ月	4 ヶ月	6 ヶ月	5 ヶ月	6 ヶ月
到達目標	日常生活に必要な基礎的な日本語を習得する	日常生活に必要な日本語の習得と理解できる	日常的な場面で使用される日本語を理解し、応用できる	日常生活に加え、進学先や職場での日本語が理解できる	幅広い分野で使用される日本語を理解し、使用できる
JLPT	N4	N4～N3	N3～N2	N2	N1
語彙数	約 1,000	約 2,000 (総計)	約 4,000 (総計)	約 6,000 (総計)	約 10,000 (総計)
書く	- ひらがなとカタカナが書ける 300 字程度の漢字が書ける	500 字程度の漢字が書ける 400 字～500 字程度の作文が書ける	800 字程度の漢字が書ける 800 字～1,000 字程度の意見文が書ける	1,500 字程度の漢字が書ける - 簡単なレポートや簡単なビジネス文書などが書ける	今まで学んだ漢字を駆使してさまざまな文章が書ける
読む	- ひらがなとカタカナが全て読める 250 字～300 字の漢字が読める	500 字程度の漢字が読める - 原稿用紙 1～2 枚程度の文章が読める	800 字程度の漢字が読める - 原稿用紙 1～2 枚程度の文書の主題を把握できる	1,500 字程度の漢字が読める - 新聞記事や短い学術論文を理解することができる	新聞の論説や学術論文を理解し、自分の意見を持つことができる
話す	- 基本的な挨拶ができる - 単語を使って日常生活の簡単な会話ができる	- 日常生活に必要な短い会話が成立する - 話題に添ったある程度まとまりのある会話ができる	- 通常のコミュニケーションができる - 問題なく会話を続けることができる	- やや複雑な会話に対応できる - 分野に応じた会話に参加できる - 場面や相手に応じた対応ができる	- 複雑な会話に対応できる - 自分の思考のとおりに、ことばにすることができる
聞く	日常生活の簡単な会話を聞き取ることができる	やや自然に近い速度での日本語が理解できる	自然な速度での日本語が理解できる	上記「話す」と同様	さまざまな場面や相手に対応し、意見交換ができる

で週に 5 日、毎日 4 時限（半日）、日本語のさまざまな学習に費やし、3 ヶ月かけてやっと初中級レベルに到達する。武蔵野美術大学の場合、入学試験では日本語能力より芸術に関する技量が優先されるため、筆者が担当している「初級日本語」よりもさらに初歩の「入門（0 初級）」クラスも存在する。英語でのレポートが認められる科目もあるが、日本語以上に英語が不得意な留学生も多い。基本的に授業は日本語で行われている。また、武蔵野美術大学の場合、初級クラスに振り分けられる学生の大半が大学院生である。彼らの特徴として、「日本語学校に通ったことがなく、独学で学んできた」「会話はできるが書くことができない」「日本語母語話者もしくはそ

れと同等レベルの教師につけなかった」「日本人に会うのは初めて」「JLPT N3 不合格」もしくは「レベル測定をしたことがない」などがあげられる。学部生では、「母国で JLPT の N2 を取得しているが、それ相応のレベルが確認できない」ことが多い。また、韓国からの留学生特有の現象として、「兵役に行く前はある程度の日本語能力があったが、兵役から戻ってきたらほとんど忘れてしまった」というようなこともある。このような現状を通常の日本語能力習得にかかる時間の三十分の一にも満たない時間で打破するのは大変困難なことである。

3. 武蔵野美術大学「初級日本語」の履修者が抱える問題に関する検討

筆者は学生の様子を把握するため、毎年春学期（前期）の第 5 回目の授業で、会話の練習も兼ねて「日本語以外の教養科目の授業は内容を聞き取れていますか？」「日本語がわからないためにおこっている身の回りの問題はありますか。」という質問をしている。この質問は各国の訳文も載せたプリントを配布し、考える時間を 10 分程度とった上で 1 人 1 人に質問している。質問は授業内で行われるため、1 人 1 人が履修者全員の中で答えることとなる。その後、履修者から出された問題を履修者全員で共有し、解決案を検討することをまとめとしている。ここではまず、筆者が担当してきた 2010 年から 2014 年度年までの初級クラスの学生 76 名があげた問題点と解決案を表 3 としてまとめた。学生から出た解決案は、学生のニーズの反映でもある。

武蔵野美術大学では、長年武蔵野美術大学の日本語教育を支えてこられた非常勤講師 1 名と筆者の提案のもと、2010 年～2011 年まで留学生相談室を設置したことがある。そこには大学院生のアルバイトが 1～2 名置かれ、決められた教室に 1 日 2 時間ほど待機しているというものだった。留学生が全く訪れないということで、1 年もせずに閉室となってしまった。開室時にアルバイトの学生に職務内容を尋ねると、「日本語の学習支援は一切しなくてよく、身の回りのことで困っていることを助けることが仕事」であると答えた。この時点で学生のニーズと実情が大きく乖離していた。日本語教育関連の専任がいればと悔やまれてならない。また、アルバイトの学生の待機時間と留学生の時間がかみ合っていなかった。実際に筆者と履修者で相談室へ出向いたが、留学生が多く登校する曜日に限って閉室とされていた。良い案であっても対象者を入念に調査した上で実行されなければ意味がないのである。

初級レベルの学習者の場合、言うまでもなく日本語に関して身に着けていることが少ない。表 3 に、前述の 2 つの質問の集計結果を示したが、自身で日本語能力の判断をする力がまだ備わっていないことがわかる。日本語科目以外の場面で「日本語」を用いて生活できているかいないか、わけがわからない状況のようである。これは日本語能力がほぼない状態と同じである。身の回りでの問題に関しては、大別して「学校や公的機関・授業や成績に影響する問題」と「コミュニケー

表3 初級クラスの学生が抱く日本語能力に関する問題点と学生が検討した解決案

※以下、意味が解るように記述された日本語を修正してある

質問：日本語以外の教養科目の授業は内容を聞き取れていますか？	合計 76 名
●ついていけない 2 名 ●だいたいついていけない 14 名 ●ついていけない 31 名 ●その他 29 名 ※以下（ ）内は 29 名の中の人数を表す ・ついていける科目とついていけない科目がある (16 名) ・聞き取った内容が正しいかどうか自信がない (11 名) ・自分では何が何だか判断できない／よくわからない (2 名)	
質問：日本語がわからないためにおこっている身の回りの問題はありますか。 記述されたもの全て	
<学校や公的機関・授業や成績に影響する問題> ●提出物が遅れる（提出日や作成方法が聞き取れなかったため／文章が書けなかったため） ●先生に怒られる（授業中の作業が遅れるため／聞いていないと思われてしまうため／時間に間に合わないため笑ってごまかすと言われた／指示されたものを持ってこられなかった／翻訳機で文章を作っていることを知られてしまったため／知り合いに頼んで宿題をやってもらったことがわかってしまったため／日本語がわからないので、つまらなくて寝てしまったため） ●確認テストがいつも 0 点に近い ●辞書を引いても辞書が読めない・書いてあることの意味が解らない ●教科書や掲示板上に書いてあることが読めない ●「大学院生・大学 4 年生なのに日本語ができなくてどうするんだ」と学校でもバイト先でもいろいろな場所で注意される ●電子辞書の電池が切れたら何もできない ●ひらがな・カタカナ対応表が手放せない ●先生の黒板の字が読めない（絵か文字かわからない） ●先生のことがわからない（ラテン語を話している※のちの調査で茨城弁のようなものであることが判明） ●学校でも公的機関でも自分が思っていることを説明できず、何も解決されない ●色々な場面で質問したいが、何がわからないかすらわからない ●学校や市役所から届く書類に書いてあることが理解できない／漢字が多くて読めない／文章が長すぎる <コミュニケーションに影響する問題> ●ゼミの日本人学生に嫌われる（足手まといになることをしたため／失礼な発言をしたため／文化の違い） ●自分だけ話に置いて行かれる／仲間外れにされる ●自分だけゼミの飲み会などに誘われない ●日本語がわからないから同郷同士が集まってしまい、日本人と話さない・遊ばない・避けてしまう <母国の日本語学習環境に関する問題点> ●母国で習った日本語が日本語ではなかった（母国の日本語教師が日本人ではなかったため） ●日本に来て日本人と初めて話した（母国の日本語教師が日本人ではなかったため） ●学んできた日本と違う（文化・食生活・政治・思想など）	
学生が検討した解決案	
<自主学习・各自の努力を要する案> ●毎日日本人と話す ●積極的に日本人に触れ合うようにする ●他大学の留学生や日本人学生とも交流する ●母国の仲間と常に一緒にいることはやめる ●母国の仲間という時や他の国の留学生といるときも日本語で話すようにする ●質問したい場合や意思を伝えたいときは単語でいいから、並べて話す ●質問したい場合や意思を伝えたいときは日本語の中に母国語をミックスしてもいいから声に出す ●「日本語が上手に話せません」とはっきり述べたうえで、頑張ってゼミの人や日本人と話す ●学校のイベントには積極的に参加する ●日本の検索エンジン（yahoo・google など）を使って、情報を確認する ●日本語でテレビを見たりやゲームをする ●翻訳機に頼らない ●友達にやってもらうのではなく、自分でしっかりやる <大学や教員の協力や指導を要する案> ●先生（筆者）の授業でまとめて質問する・他の先生にも頼る ●日本人と交換日記をしたい ●日本語の授業を増やす／日本語のクラブを作る ●某国立大学や某私立大学のようなチューターシステムを作る ●某国立大学や某私立大学のような e-Learning システムを作る ●事前学習・予習をする（先生の協力を得ながらやりたい・SNS などを使ってみんなでやりたい） ●事後学習・復習をする（先生の協力を得ながらやりやすい・SNS などを使ってみんなでやりたい）	

ジョンに影響する問題」があることがわかった。これらは日本語に触れる機会や学習時間を確保することで多くの留学生が十分解決できる問題である。しかし、「母国の日本語学習環境に関する問題点」という厄介な問題も明るみに出てきた。未熟な指導者、無知な指導者が蔓延っているようである。母国でのテキストを見せてもらったが、N3 レベルに到達するか否かの文章で書かれた解説、繁体字・簡体字と日本の漢字の区別がない漢字練習帳、そしておかしい発音を収録した CD など日本国内では到底考えられない指導者側の問題が山積していた。指導者側の問題に関しては、日本国内の日本語学校と各国が連携して運営者と指導者のブラッシュアップを図る学校も増えてきたが、まだまだその取り組みは浸透していない。この件に関しては、多くの日本語教育関係者と日本語関連分野の研究者と検討していかなければならない課題でもある。

表3には問題点を履修者が共有し、問題を解決するためにはどうしたらいいかを履修者同士で考えた結果も載せた。その解決案を分析すると、履修者の日本語能力が「これから基礎になる学習を始めよう」という段階にあることから、自主学習の仕方に大きな不安があることがわかってきた。例えば自主学習をしてもそれが正解なのか不正解なのか自信が持てないことや、何から手を付けていいかわからないことなどがあげられる。これらの心理は、履修者が提案した解決案に共通している「誰かと一緒に」という要素を含む提案に色濃く表れている。「先生の協力を得ながらやりたい」「日本人と交換日記をしたい」という提案には、日本語話者に頼りたいという願望が表れている。また、「SNS を使ってみんなでやりたい」「日本語クラブ」という提案からは、自分よりできる学習者をお手本にすればついていけそう、または、真似すればできそうという気持ちや自分だけが間違えたら恥ずかしいという気持ちを解消できるという期待があることもうかがえる。これらはサポートする側に大きな負担となる。しかし、学習者同士が学習の進捗状況を把握し合える、または教師が学習者の理解度を認識できるという利点もある。しかし、前者にあげた負担が利点を上回るため、いつでもどんな環境でも実施可能というわけにはいかない。そこで、このような問題をある程度解決できるのが e-Learning システムであるが、組織の人員やコスト、留学生数の問題で実現は難しい。e-Learning システムはインターネット上で無料公開されている東京外国語大学留学生日本語センターと情報処理センターとの共同開発によって作成された「JPLANG」を利用させていただいている。この「JPLANG」は留学生を支援する環境が十分でない組織や教員の確保などが困難な場合などコスト面でのメリットがある。筆者は、自主学習に活用するよう多くの留学生に紹介し、自身もここから学ぶところが大きい。しかし、そこに所属する学生や教員でないため、e-Learning システムならではの良さ（学生の成績情報や学習履歴を管理したり、成果に対する応答をしたり）までは利用できない。そのため、学習者のモチベーションの維持や管理、ネットワーク環境が十分に整わない学生の参加が難しい。だが、これらの学ぶべき利点を活かし、時間制限がある中での初級日本語クラスの会話能力向上に取り

入っていかなければならない。

4. 「時間数」を考慮した 2015 年度前期「初級日本語」クラスの会話能力向上を目指したプログラム

本年度から、武蔵野美術大学では「初級日本語」クラスは「会話」「文法（N2 対策）」「読解」のクラスが設置されている。筆者は「会話」と「文法（N2 対策）」を担当している。履修者は 10 名⁽⁴⁾であり、その特徴を表 4 としてまとめた。今年から留学生は、専任教員実施のプレイスメントテストによってクラス決定がなされた。本来ならば担当者として共有されるべきテスト内容や採点基準・得点等の詳細開示が認められなかった。そのため再度レベルチェックを行う二度手間が発生した。実に時間の無駄である。筆者は 2013 年、王子国際語学院⁽⁵⁾の研究費を使用し、学校システム改変のための一環として JLPT の N5～N1 に必要な語彙数に合わせた総まとめテストを作成している⁽⁶⁾。初回の授業では、このテストを用いてレベルチェックを行った。表 4 記載のテストとはこのテストのことを指している。

また、プログラム実施のため日本人学生の協力を得た。協力を得た日本人学生は、目白大学の「表現演習Ⅱ」の履修者で小学校教諭志望の学生 7 名（男性 1 名 女性 6 名）、埼玉学園大学の「日本語学概論」の履修で教職志望の学生 3 名（男性 3 名）、川口短期大学の「日本語表現法Ⅰ」の履修者 4 名（女性 4 名）であり、いずれも筆者が担当している科目を受講している。プログラムの一環であり、留学生の会話力向上のためのパートナーとなるため面接を行って選抜し、アルバイトとして参加してもらった。川口短期大学の学生は授業前の昼休みに教室に集合してもらい、「ことばや身体を使ってわかりやすく伝える」ことを課題とし、ボランティアとして毎週 10 分参加してもらった。川口短期大学の学生にはスカイプ⁽⁷⁾（テレビ電話）を利用した複数名での自由会話をしてもらった。表 4 には留学生と日本人パートナーの組み合わせも記載した。

表 3 の結果を踏まえ、2015 年の「初級日本語（会話）」のクラスでは以下のプログラムを構築し、実行に移してみた。

「初級日本語（会話）」のクラスには表 4 に示した留学生 A～J が学んでいるが、そのうちの留学生 I と J は昨年も筆者の授業を受講している学生で、本年度は自主的に聴講している学生である。彼女らは、昨年度の第 2 回目の JLPT で N2 を取得している。会話以外では十分中級レベルに達しつつあるため、今年の文法の授業の参加は認めなかった⁽⁸⁾。それ以外の履修者は、会話と文法の両方を毎週土曜日に履修している。プログラムの実施期間は、2015 年 4 月 18 日（土）から 7 月 17 日（金）までである。以下、プログラムの第 1 週目のみを示す。「○」はシラバスに記載した授業での活動を示し、「●」は授業内で行った、授業外学習のための予備学習を示してい

表4 2015年度前期「初級日本語（会話）」クラス履修者の特徴と日本人学生の組み合わせ

【留学生 A】 身分：私費留学生／大学院修士1年生 性別：男性 出身国：ポーランド 日本語学習歴：2年（母国の日本語学校に1年在籍，その後自主学習） JLPT：無 テスト：84点 特徴：フランクな会話は成立する。発音は非常に良い。会話に比べ，書くことが苦手。たまに「ひらがな・カタカナ対応表」を見て確認する。漢字はほとんど読み書きできない。 【パートナー】 埼玉学園大学人間学部人間文化学科3年生男性
【留学生 B】 身分：私費留学生／大学院修士1年生 性別：男性 出身国：中国 日本語学習歴：1年（日本の専門学校日本語コースを卒業） JLPT：N2 テスト：340点 特徴：日本の漢字と母国の漢字を混在して使用する。長音・促音・撥音の聞き取りができない。N2を取得しているが，敬語を使用しようとするとおかしな日本語になる。 【パートナー】 埼玉学園大学人間学部人間文化学科3年生男性
【留学生 C】 身分：提携校学生（期間限定前期のみ）／大学院修士1年生 性別：男性 出身国：フランス 日本語学習歴：なし（日本人に初めて接する） JLPT：無 テスト：4点 特徴：英語による間接教授法でしか講義を聴くことができない。ひらがな・カタカナは書けない。教員の板書を写すが，文字という意識がないため絵画のような文字になる。漢字に興味があるので，ビジュアル的に気に入った漢字は書くことができる。例）悪・華・葦・魔・濯 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生男性
【留学生 D】 身分：私費留学生／学部3年生 性別：男性 出身国：韓国 日本語学習歴：2年（母国の日本語学校を卒業） JLPT：N2 テスト：444点 特徴：兵役に2年間行っていたため日本語を忘れてしまっていたが，日に日に思い出し，サポートは特に必要のないレベルになっている。 【パートナー】 埼玉学園大学人間学部人間文化学科3年生男性
【留学生 E】 身分：私費留学生／大学院修士1年生 性別：女性 出身国：中国 日本語学習歴：1年（母国の日本語学校中退・日本人に初めて接する） JLPT：無 テスト：148点 特徴：あいさつはできるが，読み書きはN4レベル。全てを翻訳機にかけてこなそうとするので，成長がみられない。授業が聞き取れないため，常に周囲の仲間の通訳が必要。そのため，作業が遅れる。辞書で引いて記述しても，ひらがな・カタカナが正確に読めない。発音がとてもおかしい。 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生女性
【留学生 F】 身分：私費留学生／大学院修士1年生 性別：女性 出身国：中国 日本語学習歴：半年（母国の日本語学校中退・日本人に初めて接する） JLPT：無 テスト：100点 特徴：ひらがな・かたかなは完璧に読み書きができる。漢字が混在すると，たちまち中国語の発音になる。語彙は全く習得しておらず，文法の勉強もしたことがない。 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生女性
【留学生 G】 身分：私費留学生／大学院修士1年生 性別：女性 出身国：韓国 日本語学習歴：3年（母国の日系の会社に勤務し，そこで習得） JLPT：無 テスト：88点 特徴：フランクな会話ができるが，非常に汚い。その汚いことばを使って文章を書く。漢字はほとんど用いず，全てひらがなで書く。例）それやったか？ いまやるか？ しらねーよ。 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生女性
【留学生 H】 身分：私費留学生／学部1年生 性別：女性 出身国：中国 日本語学習歴：2年（母国の日本語学校卒業・中国人教師に学んだ） JLPT：N2 テスト：128点 特徴：敬語は話せないが，簡単な会話が成立する。N2を取得しているが，いつも助詞を抜かした文章を書く。スマホ依存症で何でもネット上にあるものを書き写すため，本人の頭の中には定着していない。日本語学校時代に誤った日本語文法と発音を教え込まれている。「～の上に」の「上」に「ジョウ」というルビ・「難しいだ」「優しいだ」「美しいな」イ／ナ形容詞のミス，用言の修飾を名詞修飾として説明してあるテキストを使用していた。 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生女性
【留学生 I】 身分：私費留学生／大学院修士2年生 性別：女性 出身国：中国 ※自分の意思により今年も在籍。 日本語学習歴：母国で自主学習1年・2014年筆者担当クラスで1年 JLPT：N2 テスト：432点 特徴：昨年は「れる・られる」「あげる・もらう・くれる」が使用できなかったが，問題なく使用できるようになった。文法は頭に入っているが，日本人の自然な速度での会話に不安がある。 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生女性
【留学生 J】 身分：私費留学生／大学院修士2年生 性別：女性 出身国：中国 ※自分の意思により今年も在籍。 日本語学習歴：母国で自主学習1年・2014年筆者担当クラスで1年 JLPT：N2 テスト：384点 特徴：昨年は，発話時のモーラのコントロールをはじめ長音・促音・撥音が良く聞き取れなかった。現在も発音やイントネーション等がおかしい。 【パートナー】 目白大学人間学部児童教育学科2年生女性

る。履修者は、「○」と「●」の内容を総合的に用いて授業外学習にアプローチしてもらいたい
が、最低限「●」の内容を十分に使うて取り組んでもらうため、毎回授業の最後の10分間を使っ
て指導している（これに対応するプリント付き）。また、文法の授業では、「アジア学生文化協会
留学生日本語コース（1997）『完全マスター2級日本語能力試験文法問題対策』スリーエーネッ
トワーク」を用いている。文法は期間中に75番まで学習した。会話では、「話の切り出し方・相
づち」「会話の流れを変える・敬語・電話でのやりとり」「許可を求める・誘う・断る・謝る」
「「～でいい」と「～がいい」」「自分の名前の由来について調べる」「日本の男性と日本の女性～
あなたの国の男性と女性～」「私の好きな歌」「効果的な誉め方」「損をしない注意の仕方」「日本
の文化とマナー」「ショートショート（ブラックジョーク）」「『河童のクウと夏休み』を検討する」
を初級レベルで扱ったが、列挙した「「～でいい」と「～がいい」」から「損をしない注意の仕方」
は、目白大学と埼玉学園大学・川口短期大学の授業内でも文法や表現の演習の一環として取り上
げており、留学生と日本人学生のコミュニケーションに活かせるよう予めシラバスを作成してい
る。（※武蔵野美術大学・埼玉学園大学・川口短期大学、左記大学のシラバス参照。）

第1週目（4/18：土～4/24：金）

【授業】（4/18：土）

会話：○表4記載のレベル判定テスト ○自己紹介 ●自己・街・国紹介の基本事項

文法：○アジア学生文化協会留学生日本語コース（1997）『完全マスター2級日本語能力試験文
法問題対策』1～5番 ●報告シートに用いる指定語句

【授業外学習】

<電話もしくはスカイプによるパートナーとの会話（4/20：月）>

内容：お互いの自己紹介

- 履修者、パートナーともにLINE[®]のグループにあてて、会話終了を報告
- 履修者、パートナーともに規程の報告シート⁽¹⁰⁾に記載

<電話もしくはスカイプによるパートナーとの会話（4/22：水）>

内容：自分の故郷・あなたの街紹介

- 履修者、パートナーともにLINEのグループにあてて、会話終了を報告
- 履修者、パートナーともに報告シートに記載

<スカイプによる複数での会話（4/23：木）>

内容：自己紹介・学校紹介

- 履修者は1週間のまとめとして報告シートに記載
- 日本人学生は、忍耐強く聞き、ゆっくり丁寧に話すことを目標とし、授業内でのポスター作製

やキャッチコピーの発表の練習の場としても活用可能

1 週間（土曜＝授業・月曜日＆水曜日＝パートナーとの会話・木曜日＝スカイプによる複数名での会話）をこのようなプログラムで構成し、通常の授業に加え、授業外学習の時間をかなり多くとらせた。留学生には、これらの活動は成績に含めるとして強制的に実施させた。留学生と日本人学生によるパートナーの組み合わせは、留学生の日本語能力や趣味、日本人学生の指導力や性格で教員が組み合わせた。各組への事前情報として、顔写真入りのプロフィールと連絡可能時間を記載したメールを4月19日（日）に筆者から送信した。今学期の筆者が担当するクラスの留学生は、家電製品としてのテレビは全員が持っているわけではないが、スカイプでTV電話ができる環境には全員がおかれていた。そのため、日本人パートナーとなる学生もそれに対応できる学生を選んだ。会話は10分程度で構わないと指示したが、パートナーが教師のようにうまく話題を聞き出すことができなかつたり、お互いゆっくり分かり合おうとして1時間以上話してしまったりした組もでた。指定したわけではないが、全ての組でスカイプによるTV電話機能を利用したという。パートナーは他教科も含め、学業に関することには介入せずに与えられた題目について会話し、会話が弾めばその他のことにも派生していいこととした。ただし、パートナーにも授業外学習に関する事前学習プリントを配布しているため、例えば、「トウキョウとキョウトを間違えていることを正す」「わたし〇〇だ」と言っているのを「わたしは〇〇です」と正すなど、その内容に限って触れてもよいこととした。木曜日のスカイプによるTV電話機能を使った複数での会話は、教員の通信機器を利用して実施した。日本人学生からは自分たちのファッション・本日のお弁当・スマートフォン等に入っている曲・誕生日を迎える学生について・自分たちの授業の課題などを話してもらった。会話重視ではなく異文化交流の場とした。そのため、お互いが自国の文化を紹介しようとしたのか、教員が指示したわけではなくビジュアルエイドを用いたりして楽しんでいるようだった。パートナーとの会話と複数名での会話（異文化交流）を行った時間数を表5にまとめた。今学期、「初級日本語（会話）／（文法）」は13回の授業があった。これを表1・表2と比較するため45分で1時限と換算すると、授業では52時限が学んだ時限となる。これに、留学生A～Jが日本語パートナー等と日本語で触れ合った授業外学習の時間を合わせるとそれぞれの日本語を学習した時間が算出される。

パートナーとの個々の取り組みについては表5に示した。一概に時間数だけでは語ることは避けたいが、表1・表2でまとめたように、多くの日本語学校で示されていた熟達度の目安とされている時間を反映するような結果となった。授業時間外学習として、日本人学生と10時限に相当する時間以上交流した留学生に顕著な結果が表れた。数値として確認できるものは表4でもあげた語彙のテストの結果である。テストは文章は変えてあるが、含まれる語彙等は変わらないも

表 5 留学生と日本人学生との交流時間

留学生	1週目	2週目	3週目	4週目	5週目	6週目	7週目	8週目	9週目	10週目	11週目	12週目	13週目	合計
A	20	70	60	60	90	30	20	30	60	80	50	30	90	1,490 (33)
	30	80	40	60	40	70	60	60	30	40	20	60	90	
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
B	10	10	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	50 (1)
	10	10	10	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	◎	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
C	20	20	×	20	×	×	40	10	10	×	×	×	30	440 (10)
	×	30	30	30	30	30	×	×	20	30	30	×	×	
	◎	×	×	◎	◎	×	◎	×	×	×	◎	×	◎	
D	30	30	80	60	90	60	80	30	70	70	70	60	80	1,710 (38)
	50	60	80	30	60	30	40	80	70	70	70	80	60	
	◎	◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
E	40	40	40	30	40	40	60	40	40	50	60	60	60	1,080 (24)
	20	30	30	10	20	20	20	40	40	40	20	30	60	
	◎	◎	◎	×	◎	◎	◎	×	◎	◎	×	◎	◎	
F	30	30	30	30	30	40	30	30	30	30	30	30	30	970 (22)
	40	30	40	30	40	40	30	30	30	40	30	30	40	
	◎	◎	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
G	20	10	20	20	20	20	20	40	30	20	10	50	10	660 (15)
	10	10	10	30	10	40	50	20	30	10	10	20	30	
	◎	◎	◎	◎	◎	×	◎	×	×	◎	×	◎	◎	
H	10	10	×	20	×	10	10	10	20	10	10	×	×	350 (8)
	20	20	×	10	10	10	20	10	10	20	10	20	20	
	◎	×	×	×	×	◎	×	×	◎	◎	×	◎	◎	
I	60	80	30	60	70	60	70	60	60	70	70	70	70	1,800 (40)
	70	60	70	60	80	70	70	70	60	60	70	70	70	
	◎	×	◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	◎	◎	×	×	
J	80	10	70	70	40	60	20	40	90	70	10	60	80	1,410 (31)
	60	30	60	20	60	60	50	40	30	60	20	70	70	
	◎	◎	×	×	◎	◎	◎	×	◎	◎	◎	×	×	

※数字は会話時間「分」・1 段目＝月曜日・2 段目＝火曜日・3 段目＝木曜日の参加の有無を表す

※合計は 1 週目～13 週目までの合計時間で、() 内は 1 時限 45 分とした場合の時限数を表す

のである。日本人学生と触れた時間が長ければ長いほど吸収した語彙が増えたといえる。留学生たちは、筆者が強制的にさせたプログラム以外に、日々多くの日本人と他の授業で日本語を聴きながら生活している。そのため、履修している科目やアルバイト、そして日常生活で日本語を使用する場面そのものが、彼らの日本語を応用できる学習の場となっていたと考えられる。筆者が

表6 個々の状況と成長の表出

【留学生 A】 【パートナー所見】	合計時限数：85 テスト＝84→316 発音はもともときれいであったが、たまに人を馬鹿にしているような言い方をするので、その点に注意した。先生からもその点指摘があったようで、A さんは一生懸命メモしながらやっていた。ポーランドという自分でも未知な国の方との交流だったので、お互いネットで辞書を引きながらしゃべったり、文化について語り合えた。A さんは吸収が早く、前の日注意したことはすぐに直してしゃべった。A さんは最初より話す速度が速くなったと思う。私も留学生に合わせた速度でしゃべることが必要なのだと知った。
【留学生 B】 【パートナー所見】	合計時限数：53 テスト＝340→324 自分は日本語がうまいから、こんなことやらなくても大丈夫と言って全く応答しなかった。うまいと言いながら、実際は自分が会って来た留学生の中で一番下手と言ってもいいくらいのレベルだと思う。自分のレベルをわかっていないことがどれだけ最悪な結果を生むか自分でも思い知った。
【留学生 C】 【パートナー所見】	合計時限数：62 テスト＝4→76 最初は全くお互い何も言えなくて、スカイプで手を振りあっているだけだった。C さんの部屋にバスケットボールがあったので、好きな選手の名前を言ってみたら反応して、いっぱい選手の名前を言い始めた。最後までこんな感じだったけど、自分がスーパーで野菜を並べているので、日本語で野菜の名前をいっぱい教えてあげた。覚えた野菜の名前を会話の中でいっぱい話していた。
【留学生 D】 【パートナー所見】	合計時限数：90 テスト＝444→500 兵役に行ったという人に初めて出会いました。D さんは最初の 2 週間ぐらいは韓国語と日本語を混ぜたような言葉を話していたのですが、それ以降は外国人だとわかるものの、問題ありません。
【留学生 E】 【パートナー所見】	合計時限数：76 テスト＝148→320 話したいことはたくさんあるようだが、スカイプ中もなかなか言葉が出てこないみたいで、ジェスチャーがいっぱいだった。お互いクイズの出し合いっこみたいな感じになったが、一生懸命話そうとしている。8 週目から力が逆転した感じがした。最初は自分からいっぱい質問していたのに、E さんから単語ながらもいっぱい質問され、言いたいことを引き出された。
【留学生 F】 【パートナー所見】	合計時限数：74 テスト＝100→264 美大生だなんて感じだった。言葉に詰まると、絵でかいて「これ何？」って聞かれました。辞書を引くより絵をかくのが早い。発音の仕方が舌足らずな感じがする。ふりっ子に思われないか心配。
【留学生 G】 【パートナー所見】	合計時限数：67 テスト＝88→128 「てめー」とか「じゃけんのう」とかどこで覚えたのかと思うようなことばを使っている。どこで覚えたのか聞くと会社で普通に使っていたとか。日本文化としてヤバいと思います。
【留学生 H】 【パートナー所見】	合計時限数：64 テスト＝128→140 翻訳して話しているので注意したら、やってないと言う。自分は日本語検定でもう 2 級を持っているから、このようなことをしなくても大丈夫だと言って集中して参加しようとしなかった。ながら作業的な感じだった。高慢な態度で、他の人の日本語レベルが低いと言っていた。
【留学生 I】 【パートナー所見】	合計時限数：92 テスト＝432→500 「あなたに～してあげます」のように恩着せがましい発言を繰り返すので、はっきりと日本人はこう感じていると指摘した。敬語の使い方などがわからないようで、先生（筆者）にそのことを連絡した。彼女はその部分だけがちょっとちゃが、それ以外はきれいな日本語を使っていると思う。
【留学生 J】 【パートナー所見】	合計時限数：83 テスト＝384→480 発音がいかにも中国人！という感じなので、はっきり指摘した。先生（筆者）からも昨年印象が悪い話し方だと注意されたらしい。I さんが気になる言い回しを何十個も演じて、それを私が嫌だと思わぬのか判定するというのがあった。ゲームのように楽しめ、マナーもかなり良くなったと思う。

授業内で行う文法の確認問題や作文を書く時間や長さにも変化があった。また、出会った頃、質問がある場合は一端台詞を書いてから読み上げたり、教員が拡大解釈しながら疑問を探り当てていく作業をお互いしあっていたが、自分から相手に通じるよう発言できるようになっている。留学生の個々の状況と成長については表6にまとめた。

5. まとめ

本来は日本人学生のアルバイトに至るまでの道のりや全ての週のプログラム内容を記載して分析していくべきであるが、紙面に限りがあるので次号で詳細を記していきたい。半期という時間制限がある中で、初級レベルかそれ以下に位置付けられる日本語能力の学生に対し、いかに日本

語以外の科目の授業で苦しむことなく学習できるか、それを目標にしながら「時間」に焦点をあてたプログラムの構築が課題であった。表1・表2で明らかのように、大学の授業のみで語学力の飛躍的な向上を目指すのは非常に難しい。現状維持が精一杯だろう。筆者は日本語学校や大学・大学院進学を目指す専門学校に現在も関わっている。今回のプログラムを構築するにあたり本人に許可をとり日本語能力の追跡調査させてもらった。国立大学に進学した現在学部2年生の留学生3名は卒業時の日本語レベルと同等であった、私立大学に進学し現在学部3年生と1年生の留学生は、卒業時よりかなりレベルが落ちていた。入学時に JLPT の N1 を取得していれば日本語を履修しなくてもいいことや同郷同士で固まって日本語を使う機会が減ってしまったことが原因である。事前・事後学習を与えるのは簡単であるが、実行に移してもらわなければ意味がない。大学生たる者、自己責任であると言ってしまえばそれまでだが、武蔵野美術大学の場合、実技重視であるばかりに、何もわからない・何もできない・学位取得論文が書けない・しかも大学院生であるという一教員レベルでは解決できない状況が発生しているが、受け入れたからには組織には責任が生じている。日本人と交流の場を与えることで今回のように大きな成果が見られるのであれば、半ば強制的にでも日本人との触れ合う企画や他大学との交流を促進していくことが望まれる。

筆者は今回のプログラム実施にあたり、筆者のクラスの履修者を強制参加させ、怠ることがないように LINE でグループをつくり、各グループの進捗状況が履修者全員で可視化できるようにし、競争心も煽らせた。留学生にとってはきっと不満だらけだろうと予想していたが、実際はそうではなかった。また、埼玉学園大学や川口短期大学は留学生がほとんどいないため、授業内で留学生の話をすると交流の機会を作ってほしいという要望も多発した。このような状況を考えると、留学生の在籍がない、もしくは少ない教育機関と留学生（外国人）との交流を必要とする教育機関が巡り合えば、Win-Win の関係が生まれると思われる。

今回は、会話能力向上のための「時間」に着目した取り組みについて、一部をここに示した。結果として言えることは、日本語能力向上には最低限確保されるべき時間が必要である。よって筆者担当の「初級日本語」クラスでは、大学の授業以外にも授業外学習で日本人と触れ合う機会を半ば強制的に作らなければ成長は見込めなかったということである。今回得られた結果を、本務校や地域日本語教室等で応用するため再度見直して検討していきたい。

《注》

- (1) 正規履修者の他、大学院の指導教員の先生からの指示により授業している学生も含んでいる。
- (2) 「条件検索結果 東京 23 区 日本語学校」『一般財団法人日本語教育振興協会』<http://www.nisshinkyo.org/search/terms.php#result>（最終閲覧日 2015. 2. 11）によると 132 件がヒットした

が、系列校（例：〇〇日本語学校の新宿校と両国校）については母体となる学校の方を調査対象とした結果、111校に絞られた。データは、ホームページ・入学案内・筆者が2012年秀明大学在職中に日本語学校訪問をした際に目標レベルと時間数に関する調査を研究の一環で行った。そのデータを統合してまとめた。

- (3) 「N1～N5：認定の目安」『日本語能力試験公式ウェブサイト』<http://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>（最終閲覧日 2015. 7. 1）より内容を引用し、以下の表にまとめた。

レベル	認定の目安 各レベルの認定の目安を【読む】【聞く】という言語行動で表します。それぞれのレベルには、これらの言語行動を実現するための言語知識が必要です。
N1	幅広い場面で使われる日本語を理解することができる 読む - 幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる。 - さまざまな話題の内容に深みのある読み物を読んで、話の流れや詳細な表現意図を理解することができる。 聞く - 幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。
N2	日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる 読む - 幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論など、論旨が明快な文章を読んで文章の内容を理解することができる。 - 一般的な話題に関する読み物を読んで、話の流れや表現意図を理解することができる。 聞く - 日常的な場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。
N3	日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる 読む - 日常的な話題について書かれた具体的な内容を表す文章を、読んで理解することができる。 - 新聞の見出しなどから情報の概要をつかむことができる。 - 日常的な場面で目にする範囲の難易度がやや高い文章は、言い換え表現が与えられれば、要旨を理解することができる。 聞く - 日常的な場面で、やや自然に近いスピードのまとまりのある会話を聞いて、話の具体的な内容を登場人物の関係などとあわせてほぼ理解できる。
N4	基本的な日本語を理解することができる 読む - 基本的な語彙や漢字を使って書かれた日常生活の中でも身近な話題の文章を、読んで理解することができる。 聞く - 日常的な場面で、ややゆっくりと話される会話であれば、内容がほぼ理解できる。
N5	基本的な日本語をある程度理解することができる 読む - ひらがなやカタカナ、日常生活で用いられる基本的な漢字で書かれた定型的な語句や文、文章を読んで理解することができる。 聞く - 教室や、身の回りなど、日常生活の中でもよく出会う場面で、ゆっくり話される短い会話であれば、必要な情報を聞き取ることができる。

- (4) 正規履修者の他、自分の希望によって聴講している留学生も含まれている。
- (5) 埼玉県蕨市にある日本語学校、校長は劉士新氏。
- (6) 「佐々木仁子・松本紀子 (2008)『にほんご 500 問～初級～』アスク／佐々木仁子・松本紀子 (2010)『日本語総まとめ N3 語彙』・『日本語総まとめ N2 語彙』・『日本語総まとめ N1 語彙』アスク」の資料編⁶⁾を参考にしたもので、名詞と絵を線で結ぶ問題・副詞挿入の問題・動詞／イ形容詞／ナ形容詞を選択肢から選ぶ問題・提示された文法項目で文章を作る問題・会話成立問題等で構成し、N5～N3 レベルのテスト (60 分・500 点満点・2000 語彙) を作成した。本稿への掲載許可を求めたが、王子国際語学院で現在も継続して使用し続けているものであるため、許可が得られなかった。理由は、主たる研究開発者が筆者であっても、王子国際語学院の研究費で開発されたものであるため内部のみで使用していきたいこと、文化庁平成 22 年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育に関する事業に関係があること、日本語教育振興協会の認定を受ける際に構築したデータが含まれることなどの問題があるため許可されなかった。大学等で用いる場合はその都度申請して使用し、必ず回収することが義務付けられている。
- (7) マイクロソフトの Skype 部門が提供する P2P 技術を利用したインターネット電話サービス。
- (8) クラスにレベル差が見られる。JLPT, N2 対策のため、履修者のレベル以上の教材を使用する。そのため、机間指導や間接教授法を用いて対応する学生も存在するため、正規履修者のみに限らせてもらった。
- (9) 韓国の IT 企業「NHN」の日本法人「LINE 株式会社」が提供しているスマートフォン (iPhone や Android)、ガラケー、パソコン等通信機器に対応したコミュニケーションを目的としたアプリケーション。
- (10) 月 日 曜日 名前 _____ 月 日 曜日 名前 _____
 パートナーの名前 _____ 留学生の名前 _____

【今日の感想を書きましょう。】	【今日の感想】
【どんなことを学びましたか？】	【会話内容】
【会場で使うことができた語句・文法・発音を書きましょう。】	【留学生のことばや発音等で気になる点】
【次の目標はなんですか？】	【対応の仕方等に関する質問】
【なにか困っていることはありますか？】	【その他】

参考文献

- 植松茂男（2014）「特区における小学校英語活動の長期的効果の研究：6年間の継続調査のまとめ」『京都産業大学教職研究紀要』9 17-38 頁
- 太田孝子（2001）「日本人パートナーが参加した「応用会話 A」クラス——2000 年 10 月から 2001 年 2 月までの実践報告——」『岐阜大学留学生センター紀要』2001 81-92 頁
- 寺沢セシリア恵子（2010）「第二外国語の学習における社会言語学的重要性について——日本語、英語及びスペイン語の呼びかけ表現の比較を例として」『文教大学国際学部紀要』21 59-72 頁
- 吉田千春（2009）「メール交換による継続的な異文化接触場面——留学生の評価を中心に——」『神田外語大学紀要』第 21 号 131-155 頁

<協力者>

- 武蔵野美術大学 2010 年～2014 年までの筆者担当の「初級日本語」を履修してきた留学生 76 名
- 武蔵野美術大学 2015 年度筆者担当「初級日本語（会話／文法）」履修中の留学生 10 名
- 目白大学 2015 年度筆者担当「表現演習Ⅱ」の履修者で小学校教諭志望の学生 7 名
- 埼玉学園大学 2015 年度筆者担当「日本語学概論」の履修者で教職志望の学生 3 名
- 川口短期大学 2015 年度筆者担当「日本語表現法Ⅰ」の履修者 4 名
- 日本健康医療専門学校 2013 年・2014 年卒業の国立大学の留学生 2 名
- 日本健康医療専門学校 2013 年・2014 年卒業の私立大学の留学生 2 名

（提出日 2015 年 9 月 7 日）